二松学舎松苓会　岩手県支部便り
発行日　二〇二二年　七月三〇日
編集人　宮本　義孝　第一〇三号

令和四年度
松苓会
岩手県支部

総会 懇親会を終えて

二松学舎松苓会・岩手県支部は、予定どおり、去る七月十七日(日)午前十一時から午後三時まで、盛岡市志家町の「サンセール盛岡」で、総会と懇親会を開催しました。

出席者は、七名でした。

（敬称略）

小笠原克夫（文34回）　伊藤　慶子（文38回）
目黒　泰（文38回）　川村　敏明（文40回）
高橋　良光（文41回）　高橋　廣至（文46回）
宮本　義孝（文32回）

尚、本部からの職員派遣は、コロナ禍のこともあり、今年は要請をしませんでした。

総会室内を出した頃は、新型コロナ感染者の数もさほどではなかったのですが、七月に入って急増し、開催予定日が近づくにつれ、過去最高の五百人を超えるようになりました。

数の多さに躊躇しましたが、総会は、ここ二年、開いていませんし、また仮りに中止しても、来年、必ずやれる、という保障はありません。

それで、懇親会を外して総会のみの実施も考えましたが、二年間も会っていなければ、お互いの無事を確認し合うことの他、いろいろ話したいこと、聞きたいこともあるだろうと思い、最終的には、感染回避に十分の気配りをして、予定通りの内容で行うことにしました。

懇親会を外さなかったことは、正解だったようです。

出席者の中には、未だ現役の方もおり、話を伺うと、会議などはオンラインで行われることが多いそうですが、内容はいつも決りきった進め方で、お互いの本音に触れる、無用の用がなく、素っ気のないものだそうです。決めるのに会合は必要だが、それが無味乾燥にならないために懇親会のような場は、あった方が良い、それが参加者の話でした。

その言葉どおり、予定していた懇親会の三時間は、話が弾み、盛り上がって途切れることがありませんでした。

同学の卒業生は、立場に利害がないせいか、安心して思っていること、考えていることを、口に出せるようです。

一方、会場である「サンセール盛岡」でも、換気や座席の並べ方、大きなアクリル板の設置など、気遣いのあるサポートをしてくれました。

そういう理由で、総会を終えて一週間ほど経ちますが、不具合なニュースは、今のところ耳に入ってきておりません。

なお、来年度の総会、懇親会は未定です。これから先の様子を見て、しかるべき時に決めたい、と思っております。

次に、長年、懸案になっている支部長の件ですが、結論的に言うと、取り敢えず、これまでどおり、宮本がつづけることになりました。

私が二〇〇五年八月に支部長を引き受けて、今年で十七年になります。一方、私は、後一年もすれば、男性の平均寿命である八二歳に届きます。曲がりなりにも活動をつづけている支部で、私のような高齢者が支部長をつづけている所は、他にありません。できれば、どなたかに引き受けてもらいたい、と思っております。

しかし、現在、支部活動に協力的な人たちは、私と同様、高齢であるか、今も現役で、仕事に重責を負っている方方です。なかなか適当な人がおりません。

それでもこの役に、何らかのメリットでもあればお願いしやすいのですが、松苓会の支部長には、得になるものは何もありません。まったくの奉仕です。そして、活動すればするほど、時間とお金に、持ち出す方が多くなります。とても、人にお願いできるものではありません。

それで、もう少しつづけようと思いますが、しかし、歳です。もし私に万が一のことがあった時は、目黒泰氏に、これまで出した支部会報と支部活動の内容や持ち方、進め方について記した覚え書きを、二冊のファイルにして、渡してあります。

私が支部長の任を果たせなくなった時は、これまで総会に出席なさってくれた方々を中心に、支部活動をつづけるなり、止めるなり、決めていただきたい、と思っています。

今回、総会では、出席した方々には、そうお願いしてあります。

最後に一つ、懇親会で出た話から考えたことを紹介します。

支部総会があった今年の七月は、大きな事件が次々と起こりました。

まず、新型コロナの感染者が急激に増えだし、連日、過去最高を記録しています。

そんな中、選挙応援中の安倍・元首相が銃撃されて死亡しました。

これは、霊感商法などで、一時、問題化した旧統一教会に恨みを抱く者の犯行ですが、この事件をきっかけに、この宗教団体と関係を持つ国会議員が、ぞろぞろと明るみに出てきました。

一方、国外では、武力をもってロシア化を推し進めるロシアと、領土を守ろうとするウクライナとの戦いは、終結の糸口が見えぬまま、つづいています。その間にも、家や街が焼かれ、命を奪われ、或は、郷土を追われ、他国に逃げざるをえなくなった難民の数も増えつづけています。

このウクライナ侵攻によって、世界の経済は混迷し、電気、ガス、ガソリンや食糧といった生活必需品が軒並み値上がりし、多くの人々の生活を圧迫しています。アフリカなどでは飢餓に直面している国さえあるそうです。

本来、人類は、民族、宗教、主義、思想の対立を超え、貧困、病気、地球温暖化などといった課題に取り組まなければいけないはずなのに、大国の、「栄光ある」だとか、「覇者たらん」だとか、「世界をリードする」だとか、元々、人間の為の理が、逆に人間を殺している、といった状況です。

嘗って、「人が、一生をとおして行なっていかねばならない大切なものが、ありましょうか」と尋ねた子貢に、孔子は、「それは恕だろうね。自分が欲しないことは、人にもしないということだ」と答えています。

イエスも同じように、「自分を愛するように、人を愛しなさい」と言っています。釈迦の慈悲も同じ謂だと思います。

人は誰も、銃を突きつけられて殺されることは、望みません。ならば、人には、そうしないことです。

懇親会での、皆の話を聞きながら、文明の発達で、我々の生活は便利になったけど、人間の生き方、考え方は、ちょっとも進歩していないんだなあ、と改めて思いました。以上です。

石川忠久さん死去

90歳、中国古典文学者

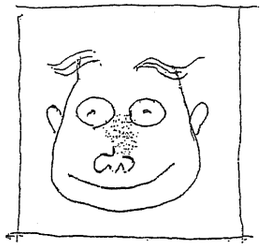
漢詩の普及に努めた、元二松学舎大学長で中国古典文学者の石川忠久（いしかわ・ただひさ）さんが12日、死去した。90歳だった。告別式は近親者で済ませた。喪主は妻・富喜代（ふきよ）さん。

東京都出身。桜美林大や二松学舎大の教授を歴任し、2001年から05年まで、二松学舎大学長を務めた。NHKラジオ・テレビの漢詩番組にも出演し、わかりやすい解説で親しまれた。著書や編著に「漢詩を作る」「漢詩鑑賞事典」などがある。

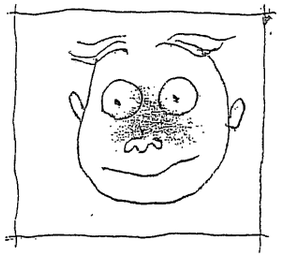
令和となった新元号の元号案では、「万和（ばんな）」を提案した。

「読売新聞」２０２２年７月２２日付

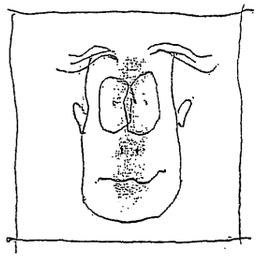
宮本義春の近況報告



私は強い近視で、眼の具合はあまり良くありません。かなり前から左眼の映像に翳が滲んでいました。



その翳が、最近だんだん濃くなり、



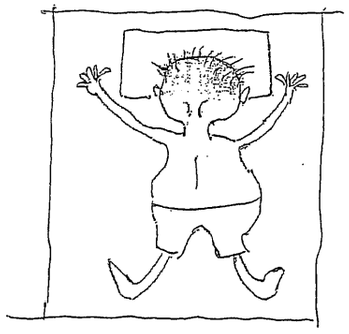
今年の1月17日、像の左と右が中央に寄って潰されたように歪んで見えるようになりました。

それで普段いきつけの志和眼科で検査してもらったところ「ひだり黄斑円孔」と診断されました。つまり、私の場合、強度の近視と加齢のため、眼球内の硝子体が変化して網膜から剥がれ網膜の中心部に穴があいてしまったということです。

そこで、紹介された岩手医大附属病院に入院し、3月23日、硝子体切除と黄斑周囲の膜の除去をしました。

手術そのものは、お医者さんまかせですので、別にどうっていうことはなかったのですが、術後が大変でした。

黄斑円孔に水が入らないように眼内にガスを置換し、ガスが常に黄斑円孔に当たるようにするのですが、ガスは軽いので、寝ている時は、俯せ、起きている時は、下を向いていなければなりません。



俯せや下を向いたままの状態でいると、胃や腸が圧迫され、ボディブローを受けつづけたように鈍痛と吐き気に襲われます。

更に枕も、顔を固定するため、鉄製の脚のあるもので、顎骨に当って痛く、頬も腫れるようでした。そういう状態が、まる2日つづきました。だから、「仰向けは駄目だけど、それ以外は自由にしていい」と言われた時は、思わず、心の内で、バンザイ!! と叫んでしまいました。

そして、3月26日、無事、医大附属病院を退院することができました。

6月現在、まだ完全とはいえませんが、志和眼科の先生の話では、この度の手術は、概ね成功した、とのことでした。

入院はいろいろ大変でしたが、病室は八階で、南昌山を中央に、北は岩手山、南は焼石岳の見える景観は見事でした。「ここに大浴場なんか在ったら、もっといいですネ」などと無責任なことを看護師さん話して帰ってきました。ドントハレ。